

お子さんの将来を 支えてくれるものは「何」？

安田教育研究所 代表 **安田 理氏**

「これからはどんな職業が有望だろうか?」「自分で食べていけるようになってほしい」「少しでも安全確実な道を行ってほしい」「自分の好きなことを仕事にしていけたらいいと思う」……わが子のこととなると、いろいろ思い、悩みますよね。で、お子さんの将来を支えてくれるものは何かについて、私なりの考えをお話したいと思います。



灘中は受験生に 何を望んだのか?

2026年度の中学入試において一番話題になった入試問題と言えば、灘中が国語で出したこの問題でしょう。パレスチナの詩人がガザの少女をテーマにして書いた「あしに おなまえ かいて、ママ」という詩が取り上げられたのです。戦火の中で、もし自分に何かあったとき、せめて名前だけはわかるように——そんな願いを込めて母に頼む子どもの声です。

問いの中には、「——線部2『ママのあしにも/ママとパパの おなまえかいて』とありますが、この時の家族の状況はどのようなものですか。答えなさい」というものもあります。この詩を、灘中が入試問題として扱ったことには、大きな意味があると思います。灘中を受けてくるような子ですから、学力は当然問題ありません。学校がこうした問題を通して求めているのは、社会への関心と“感受性”だと思うのです。

いま私たちの子どもは、平和な日本で、家族に守られ、学校に通い、友だちと笑

い合いながら成長しています。その日常は、世界の多くの子どもたちにとっては決して当たり前ではありません。この問題は「あなたは、この詩の子どもの気持ちに寄り添えるか」「遠い国の出来事を、自分とは無関係だと切り離さずに考えられるか」を見ているのです。

例として入試問題を出しましたが、社会への関心と“感受性”は、これから子どもたちが長い人生を生きていく上で、とても大切な“力”だと考えます。

会計士から溶接工へ

昨年12月、日本経済新聞にAI時代を象徴するショッキングな記事が掲載されました。AIが人間の知的労働を代替し始めた。オフィスを去って、職業訓練校で配管工や空調整備などの技術をリスキリング(学び直し)する人たちが、米国で増えているというのです。例に取り上げられていた人物は、高校卒業後、名門カリフォルニア大学パークレー校などで学び、会計士として働いていました。2019年、知人に

「数学の知識を生かして、もっと稼げる仕事があるよ」と配管工を紹介され、職業訓練校に通った。ブルーワーカーに転身した今は、月に1万2000ドル(約190万円)を稼ぎ、会計士時代の3倍だという。

日本でも右の写真の本が売られています。現在パソコン上でやれていることはAIにとって代わられるので、デスクワーク中心のホワイトカラーは不要になると予測されています。

確かにAIは、これからどんどん発達するでしょうから、認知能力では人間に勝ち目はないでしょう。

私のやっていることはごく初歩のレベルですが、AIにやってほしいことの指示を出すには、こちらがそれ相応の知識・情報・思考力を持っていなければなりません。ですから私は、現在の学校教育がムダとは思いません。高度な学力があればあるほど、的確な指示を出せると実感しています。

最近、AIに恋愛相談、人生相談をする



若者が増えているということも耳にします。が、それは生身の人間との付き合いが苦手な人の話ではないでしょうか。AIは優しく寄り添ってくれるので救われるというのですが、リアルな人間関係で生まれる悩み、葛藤、喜び、怒り、悲しみといった、さまざまな感情の海の中を生きていくことこそが人生ではないでしょうか。国、民族、性、宗教、年齢、文化といったものを越えて、多種多様な人とやり取りができる“人間性”こそが、AIにとって代われない大切な“力”だと思うのです。

この“力”は、学校だけでは育ちません。家庭での何気ない会話、ニュースを見ながらの小さな対話、誰かの悲しみに触れたときの親の反応——そうした日々の積み重ねが、子どもの心の土壌を豊かにしていきます。「どうしてこの子はこんな気持ちになったんだろうね」「もし自分だったら、どんなふうを感じるかな」。そんな問かけが、子どもの世界を少しずつ広げていくのです。

今だけを考えない

安田教育研究所を設立して25年になります。出版社時代の後半15年も教育書籍・受験情報誌の編集にあたっていましたから、現在の様な仕事を始めてかれこれ40年になります。最近つと感じていることは、教育が次の段階への準備教育になっているということです。中学に入るための長期の塾通い、高校に入るための高い内申点を目指しての日々、大学受験に向けての文理コース分け、大学では就職のために2年からインターンシップ参加……『入試』を介して日本の学校が次の段階のための準備教育になっています。そのため当然保護者の意識も次のステップに向かい、そ



れが何より大事になります。こうしたことの繰り返しで膨大な時間と労力を消費しているのが現実です。

保護者と接していても、以前はもう少しのんびりしていたというか、ゆるかった印象です。勉強以外の思いっきり遊ぶこと、社会とかかわること、いろいろな人と接することなどをもっとさせていました。目の前の壁が低かったのかもしれませんが、こうした経験の乏しさが欲求不満につながり、心が今一つ安定しないこと、さらには非認知能力(協調性、意欲、忍耐力、共感性といった数値化できない内面的なスキル)が育たないことにつながっているのではないかと考えています。

非認知能力こそAI時代を生き抜いていく上で必要とされる“力”です。冒頭の灘中の入試問題も、学校が生徒に非認知能力を付けたいと願っているからでしょう。私立中学を受験してくる恵まれた環境で育ってきた児童にこそ、世界には厳しい環境下で生きている子どもたちがいることを知り、世界の課題について他人ごとでなく自分には何ができるか考えるきっかけにしてほしいと願っているのだと考えます。

皆さんのお子さんはゲタを履いて育っているのです。一方、日本にも最初からゲタを履けない子がたくさんいます。自分や自分の周囲の人だけでなく、さまざまな境遇の下で生きている人がいる社会にも目を向ける子育てをしていただきたいと思います。そしてそうした育て方がお子さんの“社会性”“人間性”を作り、お子さんを人からリスペクトされる存在にしていくのです。

どうしても今は目の前の中学受験で頭

がいっぱいで、お子さんの学力を高めること、家族のことだけに関心が行っていると思います。受験生活は、目の前の塾のクラスの昇降、模擬試験での偏差値といったことばかりが気になる日々になりがちです。そうだからこそ上記のことを意識して生活していただきたいと思います。

これからお子さんの人生を支えてくれるのは、学力はもちろん必須ですが、これまで述べてきたように“社会性”“人間性”です。いろんなことがAIにとって代わられる時代になるからこそ、これまで以上にそれが重要になると意識してください。

私が編集者時代にインタビューしたバレエの森下洋子さんがこんなことを言っていたことを思い出しました。

「次の発表会のために練習する子は大成しない」



安田 理氏

東京都出身。早稲田大学卒業後、大手出版社で雑誌編集長を務めた後、教育情報プロジェクトを主宰、幅広く教育に関する調査・分析を行う。教育情報編集部長を最後に同社を退社し、2002年安田教育研究所を設立。講演・執筆・情報発信、セミナーの開催、コンサルタントなど幅広く活躍中。著書に『中学受験 わが子をつぶす親、伸ばす親』(NHK出版)他がある。